

## 現代漢語研究についての覚書

鈴木 丹士郎

明治期を始発とする現代語のうち、特に漢語研究の問題について日頃から抱いている関心事を中心に、しかも今まで公にした点の重複を避けて、若干述べてみたい。1 まず、造語に大きな関わりをもつ接辞―しかも接尾辞についてみることにする。体言類をつくる字音接尾辞のなかでも、ひろく《ひと》を表わすものに次のようなものがある。以下網羅的でないことをお断りしておく。今、『学研国語大辞典』から、適宜その項目と説明を摘記することにする。

しゃ【者】「多く、漢語名詞につけて」 「…する人」 「…である人」の意を表す。「出席―」「参会―」

か【家】①「…のいえ（の人）」の意を表す。「素封―」「財産―」 ②「…を専門とする人」 「…を職業とする人」などの意を表す。「評論―」「音楽―」

③「…の性質・傾向が特に強い人」の意を表す。「情熱―」「努力―」  
にん【人】②「…する人」の意を表す。「保証―」「苦勞―」

じん【人】「…出身の人」 「…（の分野）に属す人」 「…をもつ人」などの意を表す。「東北―」「映画―」「常識―」

これらに加え、《ひと》の範囲をひろげると接尾辞の意味は内容が限定されるが、次のようなものがある。

いん【員】「…の係」 「…の役」 「…する人」などの意を表す。「警備―」「調査―」

し【士】「専門の職につく」（法律上の）資格をもっている人の意を表す。「弁護士―」「栄養―」

しゅ【手】ある仕事・職務・任務を担当する人の意を表す。「運転―」「操舵―」  
さらに「官」「子」「師」のような字音接尾辞が現代語において用いられるのである。

今、明治時代を中心に、漢字二字から成る漢語に、これらの接尾辞がどのように付くのかを見ると次のようである。

者	家	人	(備考)
製造者(西 郵) 有志者(郵 經 雪 鬼 篤)	製造家(郵) 有志家(雪 篤)	製造人(郵) 有志人(郵)	有志輩(汗)
經驗者 贊成者(雪 篤) 思想者(自 文) 哲學者(坪内逍遙) <sup>3</sup> 熱心者(沼田守一) <sup>4</sup> 有力者(篤) 理學者(自) 案内者 紹介者(森鷗外) <sup>5</sup> 代理者(郵) 剃頭者(西) 被告者(郵) 編輯者(郵) 同志者(經 雪 篤)	經驗家(二葉亭四迷) <sup>1</sup> 贊成家(雪) 思想家(北村透谷) <sup>2</sup> 哲學家(經 雪 書) 熱心家(經 篤 鬼) 有力家(篤) 理學家(自 西)	案内人 紹介人(篤) 代理人(郵) 剃頭人(西) 被告人(郵 文) 編集人(郵) 代言人(郵 綠 書) 有名人士(和)	有力者(汗) 有力者(和)
有名人士(花 雪 篤)			有力者(和)

語例の( )「」内の文献は以下のとおり。

(花間) 篤 花(柳春話) 汗(血千里駒) 鬼(啾啾) 經(国美談) 西(国立志編) 自(由之理) (当世) 書(生氣質) 雪(中梅) 日(葡辞書) 文(明論之概略) 郵(便報知新聞) (国立国語研究所報告15『明治初期の新聞の用語』 緑(叢談) 和(英語林集成三版)

1 出産 2 各人心官内の秘官 3 内地雜居未来之夢 4 告国会願望諸君(東京横浜 毎日新聞 明治十三・六) 5 吃逆

表を一覧すると、わずかばかりの手控えの資料であるが、同一の二字漢語に異種の接尾辞の付くことのすくなくないことがわかる。「有志」に「者」「家」「人」が付いても指し示す内容に違いはないものであり、他にもこれと同じような事例は多いかと思われる。今は明治期の字音接尾辞の頻度を論ずるデータを持ち合わせていないが、これだけでも今日との距離はある程度推測することが可能である。たしかに今日でも「経済」には「家」も「人」<sup>(1)</sup>も付き、「使用」「支配」については「者」「人」の両方が付いて、いわゆる三字漢語がつくられる。しかし、「経済家」は、経済に明るい人、さらに節約の上手な人、の意に用いられ、「経済人」とは意味を異にする。また、「使用」は使うことであるが、「使用者」「使用人」の語になると、一方は使う人、他方は使われる人、ということになる。

明治期には今日より《ひと》を表わす字音接尾辞が多く、しかもかならずしも固定的ではなかったのではないかと思われる。それがしだいに一方の語形に整理されるか、複数の語形が意味の分化において並びおこなわれるようになってきているのではなからうか。しかし、この過程の究明は今後の問題である。

次に、相言類（形容動詞）をつくる字音接尾辞「的」についてふれることにする。「的」についての調査、研究はさかんにおこなわれてきており、その語史についても明らかにされ、ほとんど問題点は出尽くしている感さえある<sup>(2)</sup>。

ところで、少し前のことになるが、『言語生活』九九号（一九五九）は、「明治初期の言語生活」の特集を組んでいる。そのなかで見坊豪紀氏は同じタイトルの座談会で、「的」字の流行期が明治二十年頃で、それを物語るエピソードとして宮武外骨氏の言説にふれ、さらに「的」字使用の状況・変化等について要領よくまとめておられる。

宮武外骨氏の指摘というのは『明治奇聞』<sup>(3)</sup> 第五篇所収の「<sup>てま</sup>的の字の流行」という記事である。この記事は松村明氏も「明治以後の日本語」<sup>(4)</sup> で引用しておられる。詳しくはここでは省略にしたがうが、要は、明治二十二年十一月に美濃の大垣で発行された『花の友』という雑誌に載せられた記事のなかで、活版所の主人の談として、この頃の文章に「的」の字がひじょうに多く用いられて、他の活字の倍の量を用意しても間に合わないというのである。宮武氏はさらに次のようにも述べている。

此時には流行的で、ムヤミに「的」の字を用ゐたが、其後は語訳の際、何々式、何々調、何々上など書くよりは「的」の方が便宜であり、イヤ味がなく、又学者らしいとされて、流行的に使用される事に成つたが……（宮武外骨著作集第壹巻

ただ、そのような状況の中にあつて「大槻如電翁は、如何な文章にも一切『的』字を使はない事にして居る」とも述べている。この話は、広田栄太郎氏の『近代訳語考』（『的』という語の発生）に引用の大槻の言と符合するので確かなことなのであろう。

斯く申す拙者（筆者注：大槻文彦）も、三十年來、随分、文章といふものを沢山書いて、世に発表して来たが、凡そ拙者が書いた文章中には、的の字を用ゐた事は、一ヶ処もない積りである、（同書、二八五—二八六ページ）

「的」のように、当代人の情報や印象・意識の記録に恵まれてゐる事例は例外といつてよい。このようないわば言語の外部資料と文献内部にみられる實際の使用状況のデータとの突き合わせが可能になれば、いっそうその語の真相が明確になることになる。

ところで、正宗白鳥の『何処へ』（明治四十一年）に次のような記述がある。

明日は桂田を訪ねて「現代の思潮」とか何とかの問題で、的の字づくめの談話を筆記して来なくちやならん。（三）

この作品の主人公で、今は雑誌記者をしている菅沼健次の言葉である。「桂田」は恩師桂田博士をさす。ここに「的」の字づくめの談話」とあるのに注意したい。

「的」は桂田博士自身が用いてゐる「私なども進んで積極的に救済策を講ぜねばなるまい、元來通俗的の片々たる議論を世間に発表することは好ましからんので：」にみられる文字どおりの「的」だけでなく、この時代の知識人の、生硬な翻訳調の語彙・造語の頻用をもひろくさしてゐると考えるべきであらう。

「的」の外部資料の一つになりうる記述と思われるので一言してみた。

なお、現代語における「的」については次のようなことが問題にならう。

上接する語が二字漢語の場合についてみると、「感情」「散文」「家庭」「建設」など中立的な意味をもつ語に「的」が付くと、マイナスやプラスの意味が生じてくるような場合のあることである。「感情的」は、一つには、感情に関するさま、の意のほか、理性を失つて感情をむきだしにするさま、の意をも分出し、そして文脈に左右されず、後者の意で用いられることが多い。このような後者の意味をマイナスの評価義とよぶことができよう。「散文的」も同じような方向をたどる例であらう。散文のような形式・趣であるさま、の意のほかに、

選挙はむしろ散文的である。わが国のように、選挙のときのひどい騒音がなけ

れば、いつそう退屈であるかもしれない。選挙に対する社会学者の分析もまた、数字を並べるのが中心できわめて散文的である。しかし、この散文的な行為によって、政治が正しく運営される国に住むものは幸福である。(小林直樹、篠原一、柚正夫『選挙』)

にうかがわれるような意味での使用が普通であろう。

一方、「家庭的」は「家庭的に不遇である」のように、家庭に関するさま、の意のいわゆる中立的な意味のほか、家庭を大事にするさま、家庭にいるようにうちとけてくつろぐことができるさま、の意が生じ、この語の場合はプラスの評価義で用いられるのである。

「的」が付いた語形(三字漢語)がすべて、マイナスかプラスの評価義をになうわけではなく、いずれかの方向へ行くかは文脈しだいという場合もある。上接する語の意味に影響されることになるが、評価義派生のしくみや類型の解明は検討に値する課題であろう。このような問題については、廖小梅氏の論文<sup>(5)</sup>が参考になるであろう。用言類(動詞)をつくる字音接尾辞「視」については、明治期においては今日よりもいろいろの語に付くが、今は省略にしたがうことにする。

2 今日では二字漢語として定着しているものが明治期にあつては一般に三字漢語の形で使用されている場合がすくなくない<sup>(6)</sup>。筆者も先稿<sup>(7)</sup>でふれたところであるが、「同志」は「同志者」、「有志」は「有志者」、「有志家」の下略であり、「煉瓦」にいたつては二字に縮約された語形も、このほかに「(煉)火石」「煉(化)石」「(煉)瓦石」など複数がみとめられる。

一方、短縮されるのとは逆に漢字が加えられて語形が伸張される場合もある。今日では「自家用車」であるが、これはむしろ「自用车」が用いられた。

綺麗に拭込んだ黒塗の自用车らしいのが一台其処に下りて居て、待草臥た黒鴨<sup>くろがも</sup>仕立<sup>じだて</sup>の車夫が蹴込<sup>けこみ</sup>に腰を掛けて正体なく寐込んでゐる。(二葉亭四迷、其面影

・十一)

あゝ、家も阿父<sup>おとう</sup>さんの生きてなさる頃は斯うではなかつた、下女は始終三人は使つた、自用车もあつた、車夫も居たと、執拗<sup>しよくと</sup>く昔の夢を語つて(同、二十

二)

自用车で、此西片町から御所へ往くには、八時半に内を出れば好い。(森外、半日)

その他、正宗白鳥の『泥人形』、寺田寅彦の『あひると猿』にもみられる。

人力車だけでなく、自動車についても、業務用以外の車を「自用車」といつていたことがわかる。また、自家用の人力車については「自用俵くろま」も用いられた（夏目漱石『道草』九七）。次に、

漱石の『野分』に、

今川焼いまはやくは一銭に三つで婆さんの自製にかゝる。（十二）

とある。「自製」は、若い世代では耳遠くなつて、「自家製」が勢力を得つつあるらしい。「自製」の側からみると、「自家製」は一字添えてつくられた語と感じられる。しかし、「自家製」は、あるいは、たとえば『当世書生氣質』に、

倉「……時に君、おもしろい話があるから聞給へ。」繼「相替らず自家製造のノロウキングだらう。真平まっぴら々々。」（七回）

とある「自家製造」の下略短縮形の可能性も考えられる。

3最後に、漢語の意味の変化について簡単にふれておく。

「料理」は、『広辞苑』第四版によると、まず、

はかりおさめること。物事をうまく処理すること。

の意味を示し、次に、

食物をこしらえること、また、そのこしらえたもの。調理。

の意味を掲げる。ところが、『大辞林』では語釈の順序が逆になっている。これは編集方針の「解説にあたっては、最初に現代語としての一般的な意味・用法を記し、そのあとに順次特殊な意味・用法、古語の意味・用法を記した（三）」ことによるもので、『広辞苑』の編集態度が、多分、原義から転義へ、の順ということのためであろう。

『西国立志編』には「料理ス」が五例みとめられる。

緊要ノ事ニ於テハ・決シテ人ニ付托セズシテ・必ズ自ラコレヲ料理セリ。（十

三編・四一）

四例には左ルビとしてトリアツカフとある。明治初期においては、調理する、意よりも、処理する、意の方が普通であったであろう。現代からすると多少のとまどいを感じるであろうし、諸辞書にみられる用例「国政を料理する」「敵を料理する」などは、むしろクッキング (cooking) の方からの転義とみなすのは自然かもしれない。また、

苟モ勢力アレバ・吾ガ意見好尚ヲ以テ・他人意見好尚ノ規則トセント欲スル事  
ナレバ・コノ弊害ヲ隄防センガ為ニ・人民自由ノ道理ヲ講明セザルベカラズ・  
〔『自由之理』一・24才）

にみられる「隄（堤）防ス」は防止する、意であるが、今日では動詞として用いる  
ことをしない（この語についても『広辞苑』と『大辞林』の語釈は順序が逆）。  
このような漢語の事例は他にも多くあるうと思われるが、二語だけでも明治初期  
と現在とのへだたりを感じさせる。これらの追究は一語一語おこなわなければなら  
ないので、やっかいではあるが、なおざりにすべき問題ではない。

注

- (1) 野村雅昭「同字異音―字音形態素の造語機能の観点から―」（『中田祝夫博  
士功績記念国語学論集』）
- (2) 野村雅昭「近代日本語と字音接辞の造語力」（『文学』四九卷一〇号）
- (3) 宮武外骨著作集 第巻巻に所収（河出書房新社）
- (4) 『講座現代国語学』第三巻。のち『近代の国語―江戸から現代へ』（桜楓  
社）に所収。
- (5) 「『く』的』語形の評価義試論」（『専修国文』五八号）
- (6) 鈴木英夫「明治期のことば」（『図書』一九八四年一月号）
- (7) 「明治期漢語の品詞性と語形についての一考察」（『東京大学国語研究室創設  
百周年記念国語研究論集』）

（すずき たんじろう・専修大学文学部教授）